

# 相談ネットワーク通信

2025. 4月21(月)

No. 131

子育て・教育なんでも相談ネットワーク

700-0822 岡山市北区表町1-4-64 上之町ビル3F

TEL・FAX 086-226-0110 Eメール: soudan-net@vivid.ocn.ne.jp

ホームページアドレス <http://www.soudan-net.sakura.ne.jp>

## 理想・生きがい・希望・夢

難波 一夫

みなさんご無沙汰しています。相談ネットワークの難波一夫です。95歳になり、表町の相談ネットワークの事務所にはいくことはできませんが、退職以来三十余年にわたり関わってきたネットワークのことは、いつも気にかけております。時には、相談で関わったあの子は今もギター弾いているだろうか？お母さんは、元気にしているだろうか？と思ひ出したりもします。

次の方の文章は、ずっと以前に書いたものですが、新年度を迎えて、みなさんへのメッセージとして届けます。

理想・生きがい・希望・夢

生きがいについては「居るかい」と「行くかい」からなりたっているか書いています。

「私は生きていくかいがある」と思える人は、この両方の意味を自分のものに行っている人だといえるでしょう。だから、いろいろ苦労してもがんばる力が湧いてくるのです。

なんでも話せる、心をうちあけることのできる親友・恋人・親・兄弟姉妹、パートナーによってエネルギーがもらえるのです。

もう一つは「行くかい」。

ともに未来を創っていく喜び。どんな人生を生きたいのか、自分の人生を生きたいという自分の人生の羅針盤をもつて生

きていく喜びをいいます。この二つは、深く結びついています。

「居るかい」が満たされないと「行くかい」も湧いてこない。「居るかい」があるから、「行くかい」という気持ちが出てくるのです。

この二つが刺激しあって、明日の喜びが生まれます。「明日」という字は明るい日と書くのね」という歌がありました。まさに明日の喜びとは未来への展望・見通しです。

みなさん、新しい年度のスタートです。仲間と一緒にがんばってください。

なんば かずお

# 新年度を迎えて

## 「学年開き」のあいさつ原稿から

相談員 山本和弘

当ネットワークの創設者の一人で、代表世話人として活躍された故八木原藤義さんは、高校教員時代、「HRづくり」とともに「学年づくり」を重視され、「HR開き」、「学年開き」の実践を大切にされました。また、いろいろな場面での「あいさつ」を軽視せず、常に原稿を用意してお話をされました。

これを真似て私も、かつて、勤務先の玉野高校で初めて学年主任を経験した時、最初の学年集会でこんな挨拶をしました。その原稿の後半部分を抜粋してご紹介します。

新入生の皆さんへ

（１）目標をもつということです。

武者小路実篤が「千里進もうとする者と、百里進む者とは、おのずと意気込みが違わねばならぬ」というよ

うなことを言っていました。自分の値打ちを低く見積もらないで、志を高く持つて、千里進む者の心構えで、毎日の一歩一歩を歩いて欲しい。たとえ、その結果が、八百里であったとしても、心には充実感が残るし、十年後二十年後には、千里に近づくことができる。最初から千里しかめざさないものは、絶対に千里を越えることすらできないのだから。

険しい山を登る人も、その先に晴れ晴れとした山頂が待ち構えていることを知っているからこそ、しんどさに耐えられるのです。コンパスを失った旅人は、ちっぽけな丘の前にしてさえ、足がすぐむに違いありません。はっきりした目標は、今日の日のつらさを和らげてくれるのです。

「たいまつ」（むのたけじ著）という本の一節を紹介します。

『目標のない人間は、机にすわっても学ぶことはできない。目標のない人間は、首をかしげても考えることはできない。《どうするか》を考えないものに、《どうなるか》は見えない』

時間はまだあります。じっくり考えて、しかし一日延ばしにはしないで、人生の目標・将来の目標をつかんでください。

（２）玉野高校の伝統を受け継ぎ、新しい伝統を付け加えて行く一人になつて欲しい。この点については、昨日の対面式でも、生徒会長が言っていたし、来賓のあいさつの中でも繰り返して触れられていたので、重複は避けて話したい。

玉野高校には、五十数年の伝統があるという。その中身は、人それぞれにとらえかたが違うかもしれないが、勤続13年目の私の理解では、「自主・自立・自由」という伸び伸びとした気風を、最も大切にしたいと考えています。それをつくりあげ、伝えて来たのは、皆さんと同じように、希望と不安に胸をときめかせながらこの学校に入学して来て、三年間のあいだ、泣いたり笑ったり歯を食いしばったりしながら、一所懸命

この学び舎で青春を過ごして来た、同じ年頃の若者達であつたわけです。その人たちが、次の世代へ次の世代へと、バトンをリレーして来て、今、君たちがその跡継ぎのランナーとして、バトンを受け取った。先輩ランナーたちの、いろんな大切な思い出があり、愛着があるそのバトンを、やはり君たちは大切に、次のランナーに手渡して欲しい。そう願っている先輩たちの思いというのは、十分に理解できると思います。そのバトンが、足蹴にされて土にまみれたり、汚い唾を吐きかけられたとすれば、そのつらさは、想像がつくでしょう。町の人達、先輩たちの、玉野高校への愛着を、君たちはやはり、十分胸に刻んで、恥ずかしくないランニングを見せて欲しいものだと思うのです。

しかし、同時に、伝統というものは、かび臭い骨董品や、干からびた抜け殻のようなものでは決してなくて、日々新しく命を吹き込んでやらなければ生き続けられない性質のものです。伝統というのは、物まねや、模倣を繰り返しているだけでは、引き継がないし、逆に衰退していく性質をもっているんです。

ちょうど、新しい制服を着ること

になった君たちが、見かけの上だけじゃなくて、内実の上でも、どんな新しい伝統を付け加え、次の世代にバトンリレーしていきけるか、君たちの一人一人を考えて欲しいと思います。

伝統ということを考えているときに、ふと思ひ出した歌がありますので、紹介します。与謝野晶子の歌です。

**劫初（ごうしょ）よりつくり営む殿堂にわれも黄金（こがね）の釘ひとつ打つ**

劫初というのは、昔むかし、世界が誕生したころの大昔のこと。この歌は、歴史が始まって以来、人々がつくり営んで来た美の殿堂に、自分もまた黄金の釘を一本打って、ささやかではあるけれども、この殿堂づくりに貢献しよう、という、芸術家としての意気込みを歌ったものです。

私たちは、芸術家ではないけれど、そしてとても黄金の釘ではなくて、錆びた鉄釘かもしれないけれど、何か意味のある釘の一本を、玉野の歴史に刻み付けたいものではないか。もっと大きなスケールでものを言えば、人間として生まれて来たからには、人類の歴史のうえに、何か意味

のある足跡を残したいものじゃないか。それは教科書に書き記されるような大それた事じゃなくても、一人前の労働者、立派な一市民、子どもに一目おかれるおやじ・お袋になつて、いざというときに周りから頼りにされる人間になるということでもいい。とにかく、「この世に生まれて来た甲斐があつた」「俺もなかなか捨てたものじゃない」と、自分の存在を自分自身で褒めてやれるような、そんな人生を送りたいものではないかと思ひます。

「玉野高校の伝統を受け継ぎ、新しい伝統を付け加えていく一人になつて欲しい」という二つ目のテーマの、「玉野高校の伝統」という言葉を「人類の文化」という言葉に置き換えて「人類の文化を受け継ぎ、新しい文化を付け加えていく一人になつて欲しい」——こう言い換えてみると、案外、私たちが学校で学ぶというこのの意味が見えて来るような気がします。学校での勉強は、個人の利害という面だけじゃなく、人類が、営々として世代から世代へと伝えてきた「価値ある文化」を、より新しく高度なものに磨きながら、次の世代にバトンタッチしていく営みとい

う面をもつています。

イタリアのアメリカスの小説「クオレ」の中の一節に、学校嫌いになった主人公エンリーコにお父さんが書いた手紙が出てきます。今、世界中の子ども達が、いつせいに学校に通って勉強していることを想像してご覧、と述べた後で、「考えてみるのだ、もしこの動きがやむようなことがあったら、人類は再び野蠻の状態に陥ってしまうだろう。この動きこそ、世界の進歩であり、希望であり、名誉なのだ、だから勇気を出しなさい。」

（3）だから、三番は、何のために高校に来たのか、何のために勉強するのかを、いつも考えて、自分なりの答えを見つけて欲しい。ということとです。その答えは、ひよつとすると、高校在学中には見つからないかもしれない。だからといって、それが分かるまで勉強に身が入らないという種類の問題ではない。むしろ、思いっきり勉強して、勉強の面白さや、理解が広がり世界が広がっていく喜びを味わうことを通じてしか、その答えは分からないかも知れません。

昨日の入学式で、校長が、「出会い」ということを強調されました。

そして、なかでも、二つの出会いを大切にしよう、おっしゃった筈です。尊敬できる先生との出会い、信頼できる一生の友人との出会い。これには、わたしも全く同感です。そして、それにもう二つの出会いを付け加えたいと思います。

自分の中のもう一人の自分。これまでと違う新しい自分との出会いです。つまり、言ってみれば、多かれ少なかれ、親や回りからつくられた、与えられた自分ではなく、もちろんそれが基礎になるんだけど、自分が選びとり築き上げて行く、本物の自分との出会い。難しい言葉でそれを、アイデンティティと言うのかもしれないませんが、おしも押されもしない本当の自分らしさを、焦らず、しかし先延ばしにせず、しっかりと見つけ出してほしい。

そのためにも、これまでの経験のわくのなかに閉じこもり安住することじやなくて、少々困難に思えることにも、思い切ってチャレンジしてみる姿勢が大切です。勉強にも、部活動にも、HR活動や生徒会活動にも、真正面からとりくんでみて、「自分もなかなかやるなあ」「自分にもいいところがあるなあ」と自分を褒めてやれる経験を、たっぷり蓄えてほしい。

いと思うんです。高校時代というのは、それができる時期だし、自分でも驚くほどに、めきめき力がついて行く時期だということを決して忘れないでほしい。そして、一冊でもいい、心を動かされるすてきな本との出会い。人間には、十六歳のそのときに出会ったからこそ意味のある本、十七歳のそのときに出会ったからこそ、おかげさでなく人生が変わったと思う本。そういう本との出会いというものはあります。（中略）

おさらいです。先生との出会い、友達との出会い、新しい自分との出会い、よい本との出会いを、ぜひ、意識的に追求して欲しい。

最後に詩をひとつ紹介します。

紙風船

黒田三郎

落ちてきたら

今度は

もつと高く

もつともつと高く

何度でも打ち上げよう

美しい

願いごとのように

このあいさつにこめた私の思いに偽りはなく、入学・進級を迎える皆

## お知らせ

相談ネットワークの相談日を増やします。  
お仕事などで平日は時間が取れない方にも、  
利用していただこうと下記の時間帯を増やしました。

**土曜日 13:00～16:00**  
ぜひご利用ください。

さんに、今でもそのまま贈りたいエールに他なりません。しかし、この後、思いもかけず長男が不登校の長いトンネルに迷い込むという個人的な経験を経て、今なら、「頑張れ！へこたれるな！」のメッセージの前に、こう念押ししたいと感じています。まず何よりも、ありのままの自分を愛し、「うねばならない」よりも「うたい」を大切に、存分に日々を楽しもう。

やまもと かずひろ

## 十年前の警告はどうなったのか！

秋山 正美

### 山陽新聞の「滴一滴」の記事から

リリリー、リリリー。厳しい残暑への覚悟は肩すかしを食わされ、コロギの声が聞こえてきた。涼しげな声でおとなしい印象の虫だが、ある種のコロギは特別な方法で育てると、凶暴になるという▼1匹だけを透明な箱に入れ、集団から隔離する。他のコロギの姿は見えるが、じかに接触することはできないようにするわけだ▼通常、コロギ同士

ト依存の増加である。厚生労働省の研究班によると、依存傾向の人は推定421万人。5年前の約1・5倍に増えた。スマートフォン

ネットワークの相談員になって二年目の夏、西大寺でお話する機会をいただいたことがある。片付けをし

# 「僕はイヤだ」——子どもの意見表明権

相談員 花田 千春

この前、あるお母さんから聞いてほしいといわれた話。小学一年生のやんちゃで運動大好きな男の子、学童クラブに通っているのだが、学校の木に登って叱られたという。「木の登りをしてはいけない」きまりなので規則を破ったのだ。罰として「一週間の外遊びの禁止」が言い渡された。帰宅して母親に「僕はイヤだ。ほかの罰ならいいけど、外遊び禁止は絶対イヤだ」という。お母さんもスポーツが得意な方で、「子どもの木登りはむしろさせた方がよいと思う」という考えだ。私も木登りくらいと思うが、木から落ちて子どもがけがしたら、管理責任が問われる立場なら禁止にするのもわからないではない。わが子の訴えを親から先生に伝えた方がよいものかどうか、モンペ（モンスターパーアレント）と思われるでも困るのでどうしたらよいかーとの相談だった。「本人が言えるのだったら、子どもから先生に自分の言葉でそのことを伝えるのが一番い

いと思うけど、もし無理ならやんわりと伝えたら」などと雑談交えて話した。

後日、どうなったと聞くと、なんとその小学一年生はたいしたもの、自分できちんと罰を変えてほしいと先生に言ったのだ。すると、先生は「では、学童クラブで宿題を済ませてからでないと外遊び禁止」に変えてくれたそう。男の子も納得して、それから学童クラブで急いで宿題をすませるようになり、母親もこんな罰ならずっと続けてほしいくらいという。

「子どもの権利条約」の十二条に子どもの意見表明権が挙げられているが、そんなに難しいことではない。子どもの声を聞くこと、まずこれからなのだ。こどもの声を聞いた母親と先生がいて、「僕はイヤだ」と言えば受けとめてくれた。自分の意見を言えばうけとめてもらえ、そのことによって変わった。意見を言うことで自分の環境をよりよく変えた。

意見表明権を行使して、自分の教育環境を変えることができたのだ。この体験の積み重ねこそが社会を変えていく力を育てていくのではないだろうか。主権者を育てる何より大事なことでないだろうか。「どうせ選挙いつても変わらない、言うだけ無駄だ」と、あきらめている有権者のなんと多いことか。コスパを大事にする若者たちの投票率も低い。

子どもの声を聴く耳を持ち、子どもを一人の人權を持つ個人として尊重し、発言の機会を保障する。社会と大人たちがそのことをどれだけ大事にするかで、子どもの成長も社会の民主的な発展も促されるのではないだろうか。子どもが主人公と口では言いながら、大事なことは大人が決めて従わせていることはまだまだあるように思う。主権者を育てる教育の柱に「子どもの権利条約」は何より大切にしたいと思う。

※「子どもの権利条約」1989年国連で採択 日本は1994年批准

子どもの意見表明権——子どもが自分自身に関係あることについて自由に自分の意見をいう権利

はなだ ちはる

# 小学校の学校統廃合反対に取り組んで

久米南町

近藤 賢司

今、全国的に統廃合の波が押し寄せている。これは、政府の推し進める学校の適正化計画を受けてのことである。学級人数が十人規模の学校であつても「人数が少なく適正規模には及ばない」として、「学校再編」の方向で話が進んでいく。

文科省は平成27年発行の「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」の中で、小規模校の持つ「不利」として、クラス替えできず人間関係が固定化する、集団行事の実施に制約がある、授業で多様な考えを引き出しにくいことなどを上げ、その結果、社会性やコミュニケーション力が身につけにくく、切磋琢磨する環境の中で意欲や成長が引き出されにくい、多様なものの見方や考え方に触れることが難しいとしている。

一見もつとものように受け取られるこれらの理由は、全て欺瞞である。私は考えている。上記の「不利」

は、実は小規模校でもほぼ解決できることである。社会性やコミュニケーションや切磋琢磨する環境については、縦割り集団の活かし方や異学年合同授業で解決できる。特に「切磋琢磨」については教育学が使ってきた科学的な用語ではなく、「競争」を意識させる言葉であり、かえって「負け組」をつくりだし、差別意識の形成に繋がることさえあり、子どもの中の力関係を固定化しかねないといった問題性もはらんでいる。意欲や成長は「切磋琢磨」の中ではなく、学習課題を解決する中で自分に対する自己肯定感が醸成されたときに果たされるものであり、また、子どもも集団の中に支え合いとケア的な関係が築かれたときに果たされるものであると考えるからである。

行政サイドは小規模の「よさ」は敢えて強調しない。自分たちの進める方向性に不利となるからでもある。小規模であれば、個に応じたきめ細やかな学習が展開できる。ICT活

用により他校との児童と意見交換すれば多様な意見を聞きながら学習ができる。教師の目も行き届きやすく、いじめ事象も起こりにくい。地域との密接な関係も築け、支援体制も可能である。「複式解消」という言葉もあるが、複式学級の児童のほうが学力が高いという結果も出ている。

前記のような訴えを住民の方々に紙面でも伝え、地域住民に丁寧な説明を求める要望を町長、教育委員会へも伝えていったが、残念ながら力不足もあり、統廃合に進んでしまった。最終的には町内三小学校を一校にまとめ、町内に一つある中学校の敷地内に建設、小中一貫校にする流れとなった。

ところで、全国的な少子高齢化の波は小学校統廃合が加速させているという論文が多数見受けられる。小学校が統廃合された地域の人口減少が顕著になるという調査結果がでているのである。地域から学校がなくなった場合、そこに新たに住む子育て家庭は減少し、場合によっては、若者がより便利な都市へと転出する傾向に拍車がかけられることは、当然予測される。少子高齢化の波は学校統廃合へと進み、さらに少子高齢化を加速させるといった皮肉な結果

を生んでいる実態がある。地域の衰退は目に見えているのである。

今、私の住んでいる地域からは小学校がなくなり、少子高齢化が加速されるのが予想される。やがて、限界集落になりはしないかと危惧している。そうならせたいけないと、地域振興に取り組み始めている。その切り口が、跡地となる小学校の活用である。毎月一度有志で座談会を行い、意見交換の中で、課題と解決法を共有しながら、議会発言をするとともに行政にも働きかけている。昨今である。

こんどう けんじ



## 子どもがいて地域も元気 何気ない見守りがある

相談員

秋山正美

私は、地域の役の関係で月に一度小学生の通学に途中まで同行します。

四月は入学式の翌日、雨の中の登校でした。一年生は初めて長い道のりを傘さしで歩くのですから大変です。ちなみに学校までは約3km。余談ですが、おかげで、傘をもって遊びながら帰っていたのだろう、わが家の息子の子ども時代が想像できました。黄色い傘がすぐに壊れて何本も買ったものです。

通学路に面したお家の庭にきれいな花が咲いています。あまりにもきれいなので帰りに写真に撮らせていただきました。（上の写真）「小学校の入学をお祝いして毎年花を咲かせています。今年も間に合ってよかったです」「子どもたちの通学の姿を見るのが、毎日の元気のもとです」との女性の方の言葉に、朝から温かい気持ちになりました。知らないところで、子どもたちのことを見守っている大人がいる。なんとステキなこと

とでしょう。これが当たり前であってほしいですね。

学校に水筒をもっていくようになってどれくらいたつのでしょうか。熱中症対策、衛生面、色々考えての今があるのでしょうか。現実には「水筒が空になったら、水道の水を入れて帰る」と子どもの声。私の子どもの通学路途中には、以前は水を提供してくるお家がありました。もちろん水道水です。「あいさつをして、ここの水を飲むんだ」と新入生に代々伝えられていたようです。同じ地域の人が「ぼくも、飲んどった」と話が盛り上がりします。そのお家の方には感謝しかありません。「地域から学校がなくなり」スクールバスが目の前を通る地域で、子どもたちのためにきれいな花で新学期を祝ってあげようと思うのでしょうか。「登校中に子どもがけがをしたなら、どこへ連絡したらいいのかしら。学校は七時四十分までは、電話をとらないんだよ」と悩む必要はなくなるのかもしれない。が、寂しい話です。学校がある、子どもがいる、地域で、お互いが元気をもらっているのです。

あきやま まさみ



# 優れた物AI補聴器！ 音の世界を変えました！！ （難聴高齢者補聴器購入費助成事業も利用）

岡崎 茂明

わたしどもは、74歳70歳の高齢全盲夫婦。デディ（盲導犬9歳）と生活しています。

数年前から、難聴が進み、日常会話に支障を来すようになりました。

朝、台所に入って行くと、妻の起恵子が大声で怒ったような口調で話すので、

「そんなに大声で怒ったように言わんでもよからう（茂明）」

「聞こえないんだから仕方ないでしょう（起恵子）」

との口論から一日が始まっていました。

「ストレスだわ。何のために耳鼻科に行っているの。補聴器を購入してちょうだい」と強く言われ続けてきました。

「補聴器なんか買ってもおえん。使いたい物にならず、ほったらかしにしろ」という話をよく聞く（茂明）」と、

取り合いませんでした。しかし、「穏やかな日常を取り戻すためにやあ、やっぱり補聴器を買わにやあおえんなあ」と、協立病院耳鼻科で診察されている岡大のK先生に紹介状を書いてもらい、奉還町の「トーション補聴器センター」を訪ねました。そこで、スタッフのHさんに、価格帯の異なる3種類の聴き比べをさせてもらいました。最後に試聴させてもらったのが、上位機種のアークコンテック（デンマーク）製の『イント（昨年6月発売）』です。この機種は、素晴らしい一言に尽きます。

「この補聴器を付けると、健聴者の私も良く聞こえます。『今までの補聴器は、音を大きくしていましたが、『イント』は、聞き取りニーズを自動反映するAI先進補聴器なんです」とHさん。

帰宅し、「『イント』を購入

したい！他の機種ならいい」と主張。起恵子は、自身が薦めた手前、反対はしませんでした。

『イント』は、充電式両耳掛タイプ。耳上縁と頭の間に沿う楕円形状本体を装着・ワイヤー先端部がイヤホン。本体でon/off切り替え可能。コントロールで音量調整可能。

ユニット部 長27.7mm 縦幅10.8mm 厚さ7.9mm 質量3g。フル充電2時間で通常20時間使用可能。

イントの音は、滑らかで艶があり、きらきらしています。音の世界が変わりました。全く聞こえなかったエアコンのリモコンのビープ音も、少しエコーが入り、明瞭に聞こえ、起恵子の声も若やいで聞こえます。素晴らしい音色の音楽も楽しめるようになりました。

K先生・スタッフのHさん・ガイドヘルパーさん、そして起恵子に感謝します。

デンマークは、面積約4.3万平方キロメートル（九州とほぼ同じ）。

人口598万人。

社会福祉制度が充実し、幸福度ランキングNo.2の国（2024年）。

補聴器購入は、国・社会の在り方について考える機会となりました。

さて、朝の口論は、その後どうなつたでしょう。

「〇〇万円は付けているの、使っていないのなら、踏みつぶしてやるから……」

「使っていますよ。ありがとう。」と、穏やかに会話ができるようになりました。

☆県内で補聴器購入費助成を行っている自治体

補助額 50000円…吉備中央町 瀬戸内市 総社市 奈義町 備前市 25000円…岡山市

岡山市の助成事業については、以下を参照ねがいます。

難聴高齢者補聴器購入費助成事業—岡山市

<https://www.city.okayama.jp/kurasai/0000061124.html>

おかざき しげあき

## 春爛漫

春の花見の季節になると、思い出す文章がある。坪井あき子さんの「金平ざくら」。最初に手にしたのは絵本のような小さいかわい本でした。詩文集「野に咲く」から紹介します。 秋山

## 金平ざくら

坪井あき子

家の近くに「お花見」にちょうどよい広場がある。きれいな水の流れる水路があり、子どもたちが入って楽しそうに水とたわむれる。

30年ほど前、国交省がこの旭川支流の百間川堤防を整理したとき、近くに住む湯浅金平さんが、美しいこの風景を夢みて、桜の苗木を植えた。お役人から「何も植えるな」と引きぬかれるなどの妨害があつたが、交渉を重ね桜を植え続け草刈りをして整備を続けた。大水が出ると大量のごみが積もり、それをダンプで何回も運んで取り除いた。労力も費用も全部個人持ちのボランティアだが、金平さんは黙々と意志を貫いた。亡くなつた金平さんに代わって、今は息子さんが「親父の夢だったんだから」とがんばっている。ホタルの幼

虫も孵化させて毎年一万匹ほど放っている。

今年も伝えきいた多くの人々が車でやってくるほどのにぎわいがあつた。「金平ひろば」とか「せせらぎ広場」とかいわれているが、私財をつぎ込んだの篤志家があつたことを、ほとんどの人は知らない。

2013・5



百間川せせらぎ広場で水遊びをする子ども

せせらぎ広場で花見をする家族



